怨親平等の思想

橋川　正

世俗の生活を離れた佛敎は恩讐を超越したものでなければならぬ。從つて僧侶寺院が恩讐の彼方にあるとは早くから考へられてゐたのであつて、今昔物語集第二十五卷、源頼義朝臣罰安部貞任等語第十三によれば、陸奥の國司藤原登任の一族茂頼のことを述べて「軍破れて後數日守の行所を不知、既に敵の爲に被討にけりと思て、泣々我れ彼の骸骨を求めて葬せむ、但し軍の中には僧に非ずば難入と云て、忽に髮を剃りて僧と成て戰の庭を指て行く。道に守に値ぬれば且は喜び且は悲むで守と共に返りぬ」とある。剃髮して出家の姿とならねば、軍馬の間を自由に往來することは出來なかつたのである。この思想が更に積極的に發動すると佛心者大慈悲是といふ立場から、敵味方一視同仁卽ち怨親平等の思想となる。この思想はわが武士階級の間に釀成せられて、武士道の重大な一要素となり、武士道の發達と共にわが中世の前後を通じて著しく現はれ、日本武士道の上に精華を與へてゐるが、以下その點を摘記してみよう。

文治五年、源頼朝が奥州の藤原氏を征した時平泉の中尊寺に對し軍勢の亂暴を禁じてゐるが（吾妻

鏡）中尊寺は藤原氏三代の菩提所で三代の遺骸は金色堂の須彌壇の下に納められてゐるから、いはゞ敵將の墳墓の地である。敵の墳墓をあばいて侮辱を與へる暴舉は古今の史上往々にして見る所であるが、賴朝の中尊寺に對する態度は全く文明的行爲といはざるを得ぬ。同年九月、賴朝は藤原氏の領内にあつて清衡以來三代の造立に係る寺社を注進せしめ、中尊寺の諸堂以下諸寺の堂塔社殿の領地を安堵し、平泉の圓隆寺の南大門に

平泉内寺領着、任先例所寄附也、堂塔縱雖爲荒廢之地、至佛性燈油之勤者、地頭等不可其妨者也、

といふ禁制を掲示せしめて武士土賊の亂入を止め、若しこの掟に違犯した者があれば嚴科に處した。はじめて旗上をした石橋山の合戰の際も、賴朝は甲の中に聖觀音の小像を安置してゐた程の人物で、敬佛の念は頗る深かつたが、文治五年十二月には中尊寺の二階堂に模して鎌倉に永福寺を建て、藤原泰衡をはじめ實弟義經以下陣歿數萬の亡靈の冥福を祈つてゐる。これは一面からいへば怨靈を怖れる思想とも見られるが、敵味方一視同仁の態度と認めることが出來る。所謂武士の情の奥底に人間愛の純情の動いてゐることを否定することは出來まい。この賴朝の精神を體して、鎌倉幕府が大仕掛に行つたのが、建久八年十月四日の八萬四千基塔婆の供養で、これは保元以來諸國叛亡者の冥福を薦めるためであつた。北條九代記にはこれを「今年十月四日、八萬四千基塔供養塔長、五寸

諸國叛亡輩爲成佛得道也」といつてゐるが、但馬の進美寺文書に關係の敬白文がある。その冒頭には敬白五輪寶塔三百基造立供養事とあつて、幕府造立の八萬四千基の中但馬國司源親長が勸進奉行となつて五百基を勸進し、但馬國分三百基を祈禱所進美寺に於て開眼供養したが、その中六十三基は進美寺の住僧等が造立し、その他は國中の大名等の造立に係るといふ。而して寶塔勸進造立の意趣は、「去保元元年鳥羽一院早隱耶山之雲、當帝新院自諍一天已來、源氏平氏亂頻蜂起、王法佛法俱不靜、」といひ、保元の亂以來夭亡の輩は數十萬に及ぶが、何れも恨を生前之衢に遺し、悲を冥途之祇に含む類であるから、須らく勝利を怨親に混へ、拔濟を平等に頒つべきで、怨を轉じて親となさんがために寶篋印陀羅尼を書寫して八萬四千の寶塔を造立するのであるといふ。こゝに至つて怨親平等思想の成熟を見るのである。

その翌々年に賴朝は薨じ幾多の波瀾を示しつゝ源氏三代を終つて、北條氏執權の世となつて蒙古の襲來といふ前古未曾有の大事件が起つた。當時一般國民の敵愾心は彌が上にも高ぶり鎌倉武士の意氣は天に沖する勢を示したが、愈〻弘安の役が終ると北條時宗は敵軍數萬の亡靈を愍み、建長寺に於て地藏菩薩像千體の供養を行ひ、無學祖元（佛光禪師）を請じてその導師とした。法儀に臨んだ時宗は廻向文をさゝげていはく

唯願大寶王　祐助我日本國（中略）前歲及往古此軍及他軍　戰死與溺水　万衆無歸魂　唯願速救

拔　皆得超苦海　法界了無差　寃親悉平等（鎖口決語錄）。

と、こゝには國を超ね民族を越えて怨親平等の發現を見るのである。

次に足利尊氏の事蹟を擧げねばならぬが、尊氏の人物については既に辻博士の品隲があるから（史學雜誌第三十七編）、その全幅を描くことは省く。たゞ然し逆臣なればとてその行爲がすべて逆惡であるわけではなく、その中心のやみ難い惱みに至つては同情すべき點が少くない。建武三年五月、楠木正成が湊川に戰死したその八月十七日、尊氏は京都清水寺に願文を納めてゐるが、それに「この世は夢のごとくに候、尊氏にだう心（道）たばせ給候て後生たすけさせをはしまし候べく候、猶〳〵とくとん（遁世）せいたしたく候、だう心たばせ給候べく候、今生のくわほう（果報）にかへて後生たすけさせ給候べく候、今生のくわほうをば直義にたばせ給候て、直義あんをん（安穩）にまもらせ給候べく候」といふのに、もとより飾りも衍ひもない。當時は眞にこの文言通りに感じて厭世求道の念に沈んでゐたに違ひない。その後延元四年八月十六日、後醍醐天皇は吉野に崩ぜられ、玉體を南山の苔に埋め給ふたが、その報知の京都に達したのは十八日であつた。これを知つた尊氏直義兄弟の哀傷恐怖は實に甚深であつて、七七日の御忌を懇に修め奉つた。それは且つは報恩謝德のため且つは怨靈納受のためであつたが、新たに蘭若を建立して御菩提に資すべき旨を發願した（天龍寺造營記）。從つて幕府でも哀悼謹愼の意を表して七日間政務を停めたが、京都の朝廷に於てもあはてゝ廢朝を仰せ出された（中院一

品記、玉英記抄、師守記)。尊殿は又先帝の御百箇日に當り等持院で盛大な御法事を行ひ、自ら經文を寫し願文を奉つた(後醍醐院御百箇日記、本朝文集)。その願文に尊氏は切に先帝を追慕し我の今日あるは全く先帝の眷顧によるといつてゐる。而して前に發願した新蘭若を建立することは、十月五日を以て大土功を起し、尊氏は自ら土を擔ふこと三回に及んだ。當時は戰亂打續いて上下疲弊の折であるから、京都の公卿の間にも民間にも盛んに異議を唱へて中止せしめんとする者もあつたが、尊氏はこれを排して工事を進め延元四年(曆應二年)から興國六年(貞和元年)まで六年の日子を費して漸く竣功することを得、多くの寺領を施入した。その結構の壯大華麗なこと、寺領の豊富なことゝは天下禪林中の第一と稱せられた程であつた。この寺はもと光嚴院より靈龜山曆應資聖禪寺の號を賜ふたが、興國二年七月に曆應を改めて天龍と稱することになつた。嵯峨の天龍寺が卽ちこれで京五山の第一に數へられる。

尊氏は更に天皇の御廟所を造り靈位を安置し奉らうとした。興國元年三月、その意見を公卿に聽いた時には大分議論もあつたが、翌月天龍寺境內の多寶院を以て御廟に擬し奉つた。かくの如き尊氏の行爲を單に申譯的であると解するのは大日本史以來の見方であるが、尊氏は後醍醐天皇に對するばかりでなく、北條高時一族の滅亡した時にも大法會を修して亡靈の追福を行つてゐるのは、もとより名聞沙汰では出來ぬことである。

天龍寺造營と同樣の考へから六十六國に一寺一塔を造る願を發したのは弟の直義で、光巖院の
を奉じて御願所としようとした。院は延元四年にこれを許され、肥前の東妙寺、備後の淨土寺等が
も早く一國一寺の列に加へられた。一國一寺には新造のものもあるが多くは荒廢した寺を修築し
り舊寺を復興してこれに宛てた。これが卽ち安國寺で、一に六十六ケ國寺とも呼ばれた(相良文書卷一)
疎石(夢窓國師)の夢中問答に直義に示敎していはく

元弘以來ノ御罪業ト其中ノ御善根トヲタクラベバ、何レラカ多シトセンヤ、此間モ御敵トテ
ロボサレタ人幾何ゾ、其跡ニノコリテ留リテラウロウシタル妻子眷屬ノ思ヒハ何クヘカマカ
ベキ、御敵ノミニアラズ御方トテ合戰シテ死タルモ皆御罪業トナルベシ

と、直義はかくの如き疎石の示敎に感憤して一國一寺の制を立てたのであるが、これには怨親
等に罪障消滅の思想の加はつてゐることを注意せねばならぬ。

塔は卽ち利生塔であるが京都八阪の法觀寺塔は山城國利生塔で興國三年に落成した。夢窓國師
錄の中にその慶讃があるが、元弘以來の國家大亂を說いてその惡緣によつて善願を翻發すべきで
る。その善願とは所謂六十餘州內に於て每州一基塔を建つるものである。その旨趣は敢て私家の
めでなく、佛法王同時の盛興を祈らんと欲してゞある。その同向も亦自利のためでなく、此方他
一切の含識を濟はんと欲してゞあるといひ每州一塔建立の趣旨を明かにしてゐる。正平二年(北朝

貞和三年)、この年は大塔宮護良親王が鎌倉に幽囚中悲しき御最後を遂げられてから十三回忌辰にる年であるが、直義は鎌倉に利生塔を建立して親王の怨靈を慰め奉り、かねて懺悔のこゝろを表した。その旨趣は梵仙竺仙の語錄卷五の中に收める法語によつて明かである。尊氏が先帝に對す懺悔のこゝろと直義が大塔宮に對するそれとは全く同じであつて、たゞ怨親の彼岸を念ずるばかであつた。

なほ又尊氏願經の大藏經の各卷末には

願書藏經功德力、世々生々聞正法、頓悟無上菩提心、登佛果位酬聖德、後醍醐院證眞常、考二親成正覺、元弘以後戰亡魂、一切怨靈悉超度、四生六道盡沾恩、天下太平民樂業

文和三年甲午歲正月二十三日

征夷大將軍正二位源朝臣尊氏謹誌

といふ誡語があつて、尊氏の二字だけは自署である。文和三年といふと南方では正平九年で、こ年四月には吉野朝廷の柱石親房が歸幽してゐる。この願經を尊氏にすゝめたのは疎石の法嗣春屋葩(普明國師)であらうと思はれるが、それは妙葩の名が校合者として最も多く見ゐるからで、上觀光氏は「尊氏の七言十句の願文も思ふに春屋の代作であつて、尊氏の二字だけを每卷に自署せめたのも春屋の發言であつたかも知れぬ」といはれてゐる(禪林文藝史譚)。恐らくさうであらう。何

にしても以上の史料を通じて尊氏兄弟の惱み、か弱さに觸れることが出來る。

その後明德の亂平定の後、敵味方供養の法會の行はれてゐるのに注意せねばならぬ。明德二年一月二十九日、山名氏の總領陸奥守氏清は淀から一族の軍をわかつて洛中に押入り、將軍義滿をじめ、大內義弘、細川常久、畠山持國等の軍と戰つた。激戰十餘時間にわたり氏清以下叛軍の首八百七十、幕府方の戰死者百六十餘人に達した。その翌年義滿自ら施主となり內野に五山の淸衆千を請じて大施餓鬼會を行ひ、毎日法華經七部を頓寫し

陸奥前司氏淸幽儀、並諸卒戰死之亡靈、六道有情三界萬靈、悉皆得道

と回向した(明德記)。而してこのことは「去元弘建武ニ國士オヽク亡シ事嵯峨開山(疎石)大御所(氏)ニ示シ申サレシ趣、聞召及バセ給ケルニ思合ラレテ」のことといふから、義滿が尊氏の事蹟學んだことは疑ひないであらう。

次に應永二十三年から二十四年にかけて鎌倉では關東公方の足利持氏と管領の上杉氏憲(入道て禪秀といふ)との衝突に由來する所謂禪秀の亂があつた。この亂には京都の將軍家に於ける義義嗣兄弟の不和も加はつたために意外に戰局は擴大し、氏憲に誘はれた足利持仲、同滿隆をはじとして、上杉憲春、同憲方、同氏春、岩松滿氏、武田信滿等が一味となり、持氏方には疋田、上田椎津、木戸、一色等の諸家が屬し戰つた結果、敵味方共に陣歿する者が頗る多かつたので、應永

十五年十月六日にその供養碑が藤澤の清淨光寺境内に建てられた。碑は四面石塔で正面六字名號下に次の如き銘が刻まれてゐる。

自應永廿三年十月六日兵亂、至同廿四年、於在々所々、御方爲箭矢水入落命、人畜亡魂、皆往生淨土、故建此塔、於前僧俗可有十念者也

應永廿五年十月六日

相模風土記稿によると戰死者の主な人々の名が刻んであつたやうであるが、編纂者の思ひ誤りあるらしく、最初から戰死者の人名はなかつたのであらう。碑を建てた人は明かでないが、戰陣悲慘な有樣を目擊した清淨光寺の住侶が、建碑を發願して勸進したものであらう。十念あるべきなりといふから、少くとも念佛者の手に成つたことは疑ひない。昭和二年秋十月、本學國史研究員一行と共に親しくこの碑を訪れて、大震災の被害もなく現存することを確かめて欣んだことでつた。

應仁文明の大亂を一期として戰禍は全國的に擴大し、社會の秩序も甚だ亂れ國民堵に安んずるはず歸する所を失ふに至つたが、この戰國亂離の時代に於てすら武士の間には犯し難き一脈の禮が存在し、外國の戰亂に於て見るが如き殘忍虐害の行はれなかつたことは、わが國民性の研究について最も注意すべき點である。その由つて來る所はもとより簡單に說き盡すべきでないが、私は

しきにわたる佛教の感化影響をその大なる一原因に數へたいのである。既に天武天皇の御代以來牛馬犬猿鷄の五肉を絶ち、專ら菜食を主とし、家庭にあつても社會に於ても見聞する所の事實の多くは佛教に關聯し、佛教の軌範以外に脱することは到底不可能であつた。これを近く戰國時代の武士について見ても近くの寺院に入つて就學し、數年の間讀書算を學びつゝ、師匠の宗教々育を受けるのが普通であつた。かくして殘忍性は殆んど去勢され、博大な愛敵の精神まで養はれるものがまゝあつた。以上を基礎として戰國時代の道德が築かれたから、他に見るべからざる日本獨得の特性が發揮されるに至つた。のみならず陣僧、軍僧とよばれる從軍の僧侶が、神聖なる中立を標榜しつゝ平和の媒介運動を行ひ、血腥い野山に一道の春風を導くことが少なくなかつたが、かやうな僧侶の活動を許した雰圍氣を察知しなければならぬ。

永祿三年五月、桶狹間に乾坤一擲の運命の賽を振り出した織田信長は、奇計を奏してよく敵將今川義元を倒したが、尾張國西春日井郡新川町にその首を梟した。その後使僧十餘人をして禮を厚くして義元の首を駿河の府中（靜岡）に送り屆けた。而して梟首の地に信長は大卒塔婆を建てその他敵軍戰死者の亡靈を慰めるために千部法華經を讀誦せしめて供養會を營んだ。この塚を駿河塚、今川塚或ひは義元塚といひ傳へてゐる。總見記に

清洲より二十町南須賀に熱田へ行く道に大なる塚を築て義元塚と名附け弔の法事には千部の經

を誦せられ大卒塔婆を立給ふ。信長をば情ある大將哉と近國迄も沙汰しけり。

といふのがそれである。信長は一面殘忍な性格を有し、僅かの咎で人を斬つたりなどしたこともあるが、その人にしてなほかくの如き人類愛に基く行爲があつた。

轉じて九州地方に於ては天正六年十一月、大友宗麟父子は南進して島津氏と戰ひ、大友氏は島津義久、義弘兄弟に破られて多數の兵士を陣歿せしめてゐる。耳川の敗軍といはれてゐるのがこれである(島津國史、西藩野史、寛政重修諸家譜)。その七回忌の春の彼岸に當つて建てられた島津大友敵味方供養碑が宮崎縣兒湯郡川南村大字川南に現存し、俗にカンカン佛と呼ばれてゐる。碑の正面に

于時天正十三年乙酉　大施主

謹奉訓誦大乘妙典一千部爲戰亡各靈

二月彼岸　源有信　山田新介

と三行に刻み、その右側に「迷故三界域、悟故十方空」、左側に「本來無東西、何處有南北」と彫り、裏面には涅槃經の諸行無常等の四句偈が刻まれてゐる。この碑を建てた源有信は島津方の部將であつて、銘中に戰亡各靈とあるやうに敵味方を問はずその菩提を弔ふて法華經千部を訓誦したのである。

島津氏にはかくの如き怨親平等の思想がかねてより存したが、その發現として世に知られてゐる

のは島津義弘忠恒父子が慶長四年高野山に建てた朝鮮陣敵味方供養碑である。

慶長二年八月十五日、於全羅道南原表、大明囲軍兵數千騎、被討捕之内、至當手前、四百廿人伐果畢。

同十月朔日、於慶尙道泗川表、大明人八萬餘兵、擊亡畢

爲高麗國在陣之間、敵味方鬪死軍兵皆令入佛道也

右於度々戰場、味方士卒當弓箭刀仗、被討者三千餘人、海陸之間、横死病死之輩、具難記矣

慶長第四己亥歳六月上澣

薩州島津兵庫頭　藤原朝臣義弘

同　子息小將　忠恒建之

義弘は慶長二年二月秀吉の命をうけて第二子忠恒(家久の初名)等を率ゐて渡海入鮮し八月十五日諸將が南原城(全羅北道南原郡)を攻める時、義弘父子は北嶺において敵軍を伐つた。銘の初めに記するのは卽ちこの戰ひでこの戰功によつて九月十三日に感狀を受けた。次に同十月とあるのは同三年十月の誤りで父子泗川の城(慶尙南道晉州郡)に在陣中九月十九日に明將董一元等二十萬の兵を率ゐて晉州に陣を取り、十月朔日に泗川城を攻めた。義弘父子は自ら下知して火筒を放たしめ急に擊つてこれを破り、にぐるを逐ふて晉州の川際卽ち晉江に到つて首三萬八千七百餘級を討ち取つた。この時明

兵の辛うじて逃れたものは多くは溺死したといふ。島津氏の朝鮮役に於ける合戰はもとよりこの兩度に留まらぬが、花々しい戰功を樹てたものとして兩度の戰を特記し味方の戰死者三千餘人と共に敵軍の戰亡死者を併せて弔ひ共に佛道に入らしめんと念願したのである。現に高野山なる碑側には全文を英譯してその赤十字精神を西人にも傳へんとしてゐる。かつて伊達千廣がこの碑を見て詠んだ歌が隨緣集（伊達自得翁全集所收）に載つてゐる。

（高野）
同じ山なる島津義弘朝臣征韓の碑を見て

梳鞭のみつぎに絕にしうれたみもはるゝばかりの石文ぞ是

其かみをかけて思へば泣子なすうへも石蔓子の石におひにけむ

次に朝鮮役に關聯して京都の耳塚について記しておかう。その昔源頼義が奥州十二年の合戰（前九年の役）に戰亡死者の片耳を切り集めて乾して皮籠二合に入れて持ち上り六條坊門西洞院に堂を匙つて納め、これをみのわ堂と呼んだことが古事談に見にてゐる。蓋しみのわ堂とは耳納堂の轉訛であるといふ。かういふ例が平安時代にあつたとすれば耳塚も知つてか知らずしてかその先例を逐ふたわけである。

慶長二年九月二十八日、秀吉は敵軍亡靈の菩提を弔はんがために高さ五間周圍百二十間の塚を方廣寺の前に築きその上に木造の塔婆一基を立て五山の僧四百人を請じて大供養會を營んだ。南禪寺

の前住承兌の日用集にこれを「爲大明朝鮮鬪死群靈所築之塚」といつてゐるから、塚の性質は明かであるが、承兌の筆に成る卒都婆文は左の如くである。

慶長第二曆秋之仲、大相國命本邦諸將、再往伐朝鮮國、於是大明皇帝、運唇亡齒寒遠謀、出數萬甲兵救之、本朝鋭士攻戰略地、而擊殺無數將士、雖可上首功、以江海遼遠剿之、備大相國高覽、相國不爲怨讎思、却深慈愍心、仍命五山淸衆、設水陸妙供、以充怨親平等供養、爲彼築墳墓、名之以鼻塚、況又造立木塔婆一基、看々此塔婆、喚作殺人萬也得、拾做活人劔也得、喝一喝、淸風明月本同天、于時龍集丁酉秋九月二十又八日敬白。

卽ち淸風明月もと同天の思ひから築かれたのであつて、もと鼻塚と呼んだが後世耳塚と稱するやうになつたのである。三寶院の義演准后日記に「傳聞從高麗耳鼻十五桶上云々則大佛近所ニ築塚埋之」（九月十二日の條）とあるから、もとより鼻ばかりでなく耳も埋められたのである。吉川文書に

○早川長政外二名連署鼻請取狀

於珍原郡請取頸之鼻數之事

合八百七十也

右慥ニ請取申所也

慶長二　九月廿一日　　直盛　熊谷內藏允（花押）

一直　垣見泉和守（花押）
長政　早川主馬首（花押）

吉川藏人（廣家）頭殿御陣所

○熊谷直盛鼻請取狀

請取頸之鼻數之事

合三千四百八十七也

右慥請取申所也

慶長二　十月九日　熊谷內藏允（花押）

吉川藏人殿御陣所

これらの文書に現はれてゐる鼻は九月二十八日の大供養の間に合はなかつたであらうが、その後到着の分も共に埋めたのであらう。頸之鼻と叮嚀に記されてゐる通りに、首級を內地に送る手數を省くために鼻を截つたのであつて、人數を算へる點からいへば耳よりも鼻の方が便利であることはいふ迄もない。耳を截る場合は何か特別の事情に限られたであらう。首級の代りに鼻を數へたことは慶長六年九月伊達政宗の南部一揆退治の際にも行はれてゐる（伊達文書卷二）。

心を常に純に保つといふことはもとより困難である。殊に殺伐風をなす時代であつてみれば尙更のことである。然し累々たる屍骸の橫はつてゐるのを見ては氣味惡く感じ、陣中の寢覺めは決して

よくなかつたであらう。こゝに惻隱の志を起し、怨靈をおそれる怖畏の念を抱くやうになつたであらう。その心理的過程にはなほ迂餘曲折があるにしても、最後に歸着する所は淸風明月もと同天の思ひであり、恩讐を超越したる怨親平等の天地でなければならぬ。こゝに日本武士道の特殊性が發揮されたのである。私は中世の初頭から近世の曙まで辿つて來て益この感を深くするのであつて、この點は武士の精神生活を考へるに當つても是非顧みなければならぬと思ふ。

昭和四年九月七日、秋雨の音を聞きつゝ草す